

頃帰って来て驚いた、高熱で勝美が倒れていた。ハシカだった。くるしまぎれに窓に寄りかかりお母さんの帰りを待っていたらしくガラスには小さな手のあとが白く水ついていた。なんとあわれ三日後には息をひきとった。こうしたことが、各家々におこっている。果してこのような幼な児が、何十人出たであろう爪と髪を切り、沖繩に持ち帰った。暫くして、難民はハルビンへ移動した。ハルビンの花園収容所はごったがえしていたが、この中に赤痢が蔓延し、次から次へと倒れた。その人達はかくれ部屋に運び込まれたが、元気で戻った者は一人もなかった。親無し児も多数出た。ゆえに致し方なく中国婦人に預けられた。これが日本人残留孤児達である。地獄の中の地獄。人間の心は一カケラもなく、どんな不幸が発生してもマヒした人間は誰一人涙する者はいなかった。

その中に長男の健一郎が亡くなった。同じく爪と髪を切り二人の遺品として持ち帰った幾日が過ぎ古里沖繩にたどり着いたときは、世はまさに変わっていた。その翌年には主人もシベリヤからヤセこけて帰還した。お互い

地獄を渡り終えた。

愈々本当の二人の世界がはじまったのです。子供も四人出来、今はめいめいが世帯を持って幸せに暮らしている。しかしままにならぬのが人の世の常、六年まえに主人も帰らぬ人となった。一人とり残され私、どう生きて行けば良いやら今は主人の位牌と子供二人の魂の入った位牌を前に、時の流れにそって生きて居る老人である。

国策で渡満、開拓したが

高知県 山本 義雄

政府は、国策として、食糧増産その他の目的をもって、満州開拓を農民達に奨励していた。その頃、円行寺の住民を主体として、初月郷開拓団をつくり、錦州市女兒河区に入植することになった。その頃、私の家族は、妻と幼児一人と年とった両親の五人家族でしたが、満州の生活が安定したら両親を呼び寄せるつもりで、まず夫婦と子どもと三人で渡満しました。しかも入植後まもなく敗

戦となり、初期の目的は達成どころか、持参していた物品、金、着ていた着物まではぎ取られ、裸同然で引き揚げてきました。満州から引揚げは、皆同じだったとおもいますが、私は二十九歳だったので、召集がきて、敗戦まじかに入隊しましたので、妻は、おむつをさげ、幼児を背負い、高りゃんの中を逃げまどい、大雨で橋が流れている所も無理して渡り、錦州市に非難したそうです。

私は入隊したもののろくな銃はなく、菊のご紋章を消して、いったんは廢銃としてあった物と思われる銃を五人に一丁ぐらいの割であてがわれ、弾は一発もなかったにもかかわらず「お前達は二十日間て一人前の兵隊になれ」といって訓練させられ、武器もないのに、汽車に乗せられ、北へ北へと送られて、バリケードを作り、機銃のすえている駅で降ろされ、近くの山中で暮らしていた。ここ西北方より敵の大軍が南下しているとの情報はいっていたが、敵と遭遇することもなく、使役の兵が新京へ兵器の受領に行っている留守の中に終戦となり、彼らは手ぶらで帰ってきた。私達はこの地で一戦も交えることなく、見ざる敵に降伏したのです。そして、米五

合たくあん一本、塩一握りを支給されて、現地で解散させられたので、元の開拓団へ帰ったが、そこにははいることもできず、日本人はすでに錦州市へ避難して行ったと聞かされ、ようやく探しあて、妻子といっしょに暮らすようになりました。

食うためには手あたりしだい、なんでも仕事をし稼ぎました。妻は幼児を背負い、豆腐やたばこ、まんとう等を売り歩き、子どもが凍傷になったこともあったが、治安は良くなり、三人共ぶじに零下三十度の冬を越え、翌年五月、帰国しました。家こそあったが、食っていくためには、えり好みなく、なんでも仕事をし、最低の暮らしが続きました。すこし農地があったので、百姓をしながら、はたらいていました。終戦がもう少しおそかったら、われわれはほとんど生きては帰れなかつたらう。終戦間きわまで元気な男は皆召集され残っている者は老人と子どもだけだったので、開拓団はほんとうにあわれであり、多くの犠牲者が出、今もって敗戦の苦悩と苦労がつきまといっている。関東軍の強い要請で、政府は開拓団を満州に送り、軍のためにも食糧や糧秣を作り協力を

したにもかかわらず、関東軍はわれわれ開拓団を放り捨てた如く、なんの援助もせず、勝手に引揚げたのは同じ国民として腑に落ちず、たいへん残念に思う。

十一年の満鉄生活

埼玉県 松 永 三 郎

昭和九年四月、本籍地福岡県直方市より渡満。同年十月、満鉄入社。遼陽医院に勤務。十七年四月、鞍山医院に転勤。十九年四月、黒河医院に転勤。二十年五月、召集令状のため、黒河に家族を残し、黒河近くの部隊に入隊し、六月初旬一か月の行軍でチチハル市街の部隊に移動。

あの忘れることのできない八月十五日の終戦詔勅を営庭で聞きました。十八日に、ソ連兵が武装解除のため進駐してくるとのことで隊内は騒然としたものでした。

十七日、隊長命令で、満鉄出身の隊員八人に除隊命令が出されました。のちほどわかったことですが、鉄道業

務に協力をさせることでした。

除隊後、チチハル市内の満鉄独身寮にまぎれこみ、軍服を焼却し、社員とともに行動をとることになりました。チチハル在住中、かつての戦友達が市中を通り、ソ連領へ連行される姿を盗み見たときは、たえがたい思いで一杯でした。

九月の終わり頃、黒河より集団南下した家族の消息を求めやっとの思いで新京の駅前、満鉄社宅に雑居中の家族と再会できました。妻は七か月の身重でした。数日新京に滞在し、無蓋車で集団で奉天に南下し、ヤマトホテル前の義光街五階建アパートに落ちつきました。一室三世帯の雑居生活、厳寒の中の一冬、まったく筆舌につくせぬ辛苦の連続でした。二十一年七月、コロ島より引揚げ船で博多港に上陸し、焦土と化した福岡市内の現況を見、涙を禁じ得ませんでした。

日本の家に着いた時には、六百円だけで、帰れば、父は死に、年老いた母が子どもを連れて働いていました。学歴はなく、技術はなく、年は多いし、働く所はなし、一生懸命で田畑を作りました。供出は部落でいわれたと